

シェルパと観光

— 20世紀初頭から1980年代まで —

鹿 野 勝 彦

目 次

I はじめに	3 第2期—ネパール、1950～60年代
II シェルパにとっての観光	4 第3期—ネパール、1970～80年代
1 前 史	III 「シェルパ」のイメージとシェルパの対応
2 第1期—ダージリン、1920～30年代	IV おわりに

I はじめに

本稿はネパール東北部、ソル・クンブ (Solu-Khumbu) 地方を故地とするチベット系の民族集団シェルパ (Sherpa) の、観光 (tourism) との関係を、今世紀初頭から1980年代にかけて具体的にたどり、その過程でシェルパとかかわった人々によるシェルパの位置づけやイメージの変化と、シェルパ自身の対応とを考察することを主な目的とする。

ここで観光とは、とりあえず SMITH に従って、やや広義に、「楽しみを求めて自発的になされる旅行」と把えておくが、それが典型的には西欧などの先進資本主義圏から発展途上国を対象とする、大量の観光客の流れを出現させるという形をとるのは、一般には1950年代初頭からであり、その傾向は以後急速に加速化されてきた。¹⁾これにともなって、観光の過程で必然的に生じる異文化接触や、とりわけ観光の対象となった地域での経済、社会、文化の変化の過程は、文化人類学においても、1970年代以降積極的に取り上げられるようになってきた。²⁾

シェルパについてみれば、ネパールが1950年に外国人旅行者に門戸を開放して以来、ソル・クンブ地方が多く観光客を引き付けてきたこと、シェルパ自身が積極的に観光業に携るようになってきたことなどを背景として、観光がシェルパ社会に与えたインパクトを記述、分析した研究は少なくない。³⁾これらの研究は、観光の影響への評価はさまざまであるが、その多くはシェルパと観光のかかわりを、基本的には1950年、すなわちネパールの外国人旅行者への開放以降の問題ととらえ、シェルパの経済がそれ以後、急速に観光への依存を深めるとともに、その社会、文化も大きな変化を遂げたとみる点において共通している。

しかし本論で後述するように、シェルパが観光に積極的に関与しはじめるのは、1920年代の、当時の英領インド有数の保養・観光地であったダージリン (Darjeeling) においてであり、⁴⁾それ以降1930年代にかけて西欧で確立した、「シェルパ」イコール「ヒマラヤ登山の高

所ポーター」としてのイメージは、1950年代以後のシェルパと観光のかかわりのあり方をも大きく規定することになる。⁵⁾いいかえれば、現在のシェルパと観光の関係を考えるにあっても、1920年代のそれにさかのぼって把えなおすことが必須であるのだが、そのような作業はあまりなされてこなかったといえる。

そこで以下ではまず、シェルパの観光とのかかわりを3つの時期、すなわちダージリンへ出稼ぎに行き、ないし移住したシェルパが主に観光とかかわっていた1920～30年代(第1期)、ネパールが開国し、欧米や日本などの比較的少数の登山家、観光客がソル・クンプを含むネパールを訪れるようになった1950～60年代(第2期)、そして観光がネパールの主要な産業に成長し、欧米や日本のみならず、インドを含むアジア諸国からも大量の観光客がネパールを訪れるようになった1970～80年代(第3期)に区分し、各々の時期の特徴を明らかにすることを試みる。ついでこの過程で、外部からのシェルパに対するイメージがどのような背景のもとで形成され変化してきたか、またそれに対してシェルパ自身はどのように対応してきたかを検討する。その際、第1期に形成された「シェルパ」のイメージが、どのような役割を果たしたかが重要な論点となる。そして最後に、現状において、そのような「シェルパ」のイメージの持つ問題点を指摘することとする。

II シェルパにとっての観光

1. 前 史

民族集団の単位としての境界は、それを自称する人々の内部においても、外部の人々の視点からも、常に多少の曖昧さを持つが、そのことはシェルパにおいても例外ではない。現在のネパールのセンサスにおいても、シェルパ語を母語とする人々はボテ(Bhote、すなわちチベット系諸語を母語とする人々)と一括して扱われ、独自の言語集団としての人口が明示されていないことから推測しうるように、ネパールにおいて優勢な民族集団である、いわゆるパルバテ・ヒンドゥー(ネパール語を母語とするヒンドゥー教徒、とりわけいわゆるバウン Bhaun、チェトリ Chhetri など上位諸カーストに属する人々)から見れば、シェルパはボテの一部をなす集団にすぎない。⁶⁾

現在、シェルパを自称する人々の分布は、ネパールでは、東部高地のソル・クンプを中心として、東はインドのシッキム州、西ベンガル州のダージリン地区から、西はカトマンズ周辺までの、高地、中級山地と都市部に及んでいるが、その全てが無条件にシェルパと認められているわけではない。ソル・クンプにおいては、住民は外部からは一括してシェルパとみなされているが、内部では本来のシェルパと、比較的近年、外部(主にチベットの南部や東部)から移住してきた人々は幾重にも区別されているし、⁷⁾カトマンズ北方のヘランブー(Helambu)地方の住民はシェルパを自称するが、ソル・クンプのシェルパは、彼らをシェルパと認めていない。⁸⁾ OPPITZによれば、シェルパは、もともとは16世紀に東北チベットから

ソル・クンプへ移住し、定着した人々を中核とし、その後さまざまな要素を加えて構成された後、さらにそこから各地へ拡散していったとされるが、⁹⁾ソル・クンプとシェルパをめぐる人口の流動は現在にいたるまで続いており、その正確な動向を把握することは、特に周辺部では決して容易ではない。

しかしこの間ソル・クンプには、主にチベットから、ある程度の人口が不断に流入して来ていた¹⁰⁾反面、周辺地域¹¹⁾やダージリン地区などへ、やはり相当数の人口が流出していたことは明らかである。ダージリンについてみると、シェルパと称される人々の人口は、今世紀初めですでに3,450人、¹²⁾1947年には6,929人に達していた。¹³⁾ソル・クンプのシェルパの人口(いわゆるカンバを含む)は、1965年のOppitzの統計でも14,126人にすぎない。¹⁴⁾ダージリン一帯が開発されたのは、以下で述べるように19世紀半ば以降のことだから、この間のソル・クンプからダージリンへの人口流出の勢いがかなり激しかったことは、上の数字からも読みとれよう。

ところで、もともとは人口稀薄な森林に覆われた丘陵地であったダージリンの一帯は、ネパールの侵攻を受けたシッキムが、その失地回復のために武力介入したイギリスに対して、保養地建設用地として1830年代に割譲した後、急速に発展した地域である。当初、ホテルや病院、別荘などが建設され、夏から雨期にかけて、カルカッタから多くの観光、保養客を迎えたダージリンの町の周辺は、道路、鉄道などの整備にともなって、茶をはじめ、キナ、コーヒー、チークなどのプランテーション経営の適地としても注目されるようになった。¹⁵⁾19世紀後半から20世紀初頭にかけて、ダージリンの町そのものの人口も、その周辺一帯を含むダージリン地区(Darjeeling District)の人口も、急速な増加を見せる。¹⁶⁾この発展の過程において、保養のための諸施設においても、プランテーション農場においても、また都市、道路等の建設そのものにおいても、膨大な労働力を必要としていたことは言うまでもない。そして、シッキムからダージリン一帯の山地は、19世紀半ばまでは、一般に比較的人口密度の稀薄な地域であった。

これに対して、隣接する東部ネパールの山地は、当時すでに、ある程度の余剰労働力をかかえた、いわば人口過密の地域であった。ソル・クンプにおける19世紀後半から20世紀前半にかけてのシェルパの経済は、農業、牧畜、交易の3つの生業の組み合わせによって支えられていたという見解¹⁷⁾は、大筋としては正しいといえる。もっともそれらの生業の比重は、時期によっても、地域によっても、さらには村落、世帯によっても著しく異なっていたことが明らかになっている。そのことは筆者自身もすでに何度か述べているので、ここで繰り返すことはしないが、¹⁸⁾19世紀後半から20世紀初めにかけて、シェルパが主に住んでいた高地では、チベットからの人口流入の下で農業や牧畜のための開発はほぼ限界に達しており、交易においても、カリンボン(Kalimpong)からチュンビ(Chumbi)溪谷を経由して、ヒマラヤ南面とチベットを結ぶルートの開通が脅威となり始めていた。¹⁹⁾また中級山地帯におい

てはグルカ王朝の支配の確立を背景として、西からバルバテ・ヒンドウーの移住にともなう急速な人口増加や、新しい土地所有、徴税制度の導入があった。²⁰⁾これらの条件の下で新しい可能性を求めて、若年層を中心とする多くの人々がダージリン周辺へ流出していったのである。²¹⁾ダージリン一帯の急峻な地形と冷涼な気候は、ネパール山地出身の人々にとって、インド平原出身者に比べ有利な条件として作用したであろう。1901年のセンサスによれば、ダージリン地区の人口の半数以上は、ネパール系の住民が占めていたとされる。²²⁾

もっとも、ここでダージリンの統計にあらわれたシェルパのすべてが、ソル・クンプ出身の人々であったかどうかは疑わしい。おそらくそのかなりの部分は、いわゆるカンバのみならず、ネパール国内ではシェルパと自称せず、他の人々からもシェルパとは区別して認識されていた、東部ネパール高地のさまざまなチベット系民族集団に属する人々や、チベット出身だが東部ネパールを經由してダージリンへ来た人々が占めていたと考えられる。²³⁾

要するに20世紀初頭のダージリンは、すでにカルカッタを初めとするベンガル平原の上流階級の保養地としての地位を確立し、夏期には政庁が移された時期もあって、都市としての規模は小さいながら、当時の英領インドとしては最高の生活水準を享受できる施設が整備されていた。こういったリゾートの生活を底辺から支えていたのが、ネパール山地からの出稼ぎ労働者だったのであり、シェルパもその一部を構成していたと考えられる。ただ彼らの多くが従事していたのは、建設労働や物資の運搬、茶園労働などだったのであり²⁴⁾、そこではまだ彼らが特に観光と密接な関係を持っていたわけではない。

一方、ヒマラヤを直接の対象とする登山、徒歩旅行などが開始されるのは、19世紀末の英領インドにおいてである。中でもその多数を占めていたのはインド駐在のイギリス人将校達であり、彼らはヒマラヤ山地での旅行に山地出身の兵士、とりわけネパールで徴募された、いわゆるグルカ兵をとまなうことが多かった。しかし、グルカの役割は、登山そのものの補助というより、むしろ必ずしも十分に治安が維持されていない通過地域での護衛や、現地住民との間の通訳、物資や駄獣の調達などが主であり、彼らはそれを職業としていたわけではなかった。²⁵⁾ちなみに、グルカの組織的徴募が、ネパール政府との合意に基いて開始されるのは1886年からで、ダージリンにも、東ネパール出身の住民を徴募するための事務所が開設されるが、シェルパを含むボティアは、ほとんどグルカには応募しなかったといわれる。²⁶⁾

2. 第1期－ダージリン 1920～30年代

ダージリンのシェルパが、ヒマラヤの登山やトレッキングに職業として(すなわち、いわゆる「シェルパ」として)参加するきっかけを作ったのは、1921年のイギリスのエヴェレスト(チョモランマ)登山隊であるといつてよい。この隊は、ダージリンで約40名のシェルパを主とするボティアを雇用し、5月から10月までの約半年、チベット高原の横断旅行と偵察登山のポーターとして使用した。続く1922、24年の登山隊は、実際に登頂を目指して、長期間雪線

以上で滞在、行動したが、これらの隊は1921年のシェルパの実績を高く評価し、各々50名以上のシェルパをやはりダージリンで雇用して、主に雪線以上での荷上げに専念させ、待遇面でも、他のポーターと明確に区別するようになった。²⁷⁾これらの隊で、シェルパのヒマラヤ登山における高所ポーター、トレッキングガイドとしての高い評価は定着し、1920年代後半になると、ダージリンを起点とする登山隊ばかりでなく、英領インドのヒマラヤの西部を訪れる登山隊も、わざわざ実績のあるシェルパをダージリンから呼びよせて雇用するようになる。そして、このような流れを決定づけたのが、インドにおけるヒマラヤン・クラブの成立と、そのダージリン支部の設置であった。ダージリン支部は、高所ポーター、ガイドとして活動できる「シェルパ」を登録し、登山隊の求めに応じて、統一した条件の下に斡旋、派遣する業務を行うとともに、これらの「シェルパ」の記録を整備し、優秀な業績をあげた者には「タイガー・バッジ」を与えて顕彰する制度もつくる。²⁸⁾ヒマラヤン・クラブ自体は、「シェルパ」を体系的に訓練したわけではないが、登山、トレッキングを行った人々の多くを占めていたイギリスの登山家達は、隊を英領インド軍の組織をモデルとして運営し、登山技術のみでなく、生活習慣やエチケットに至るまで、徹底した訓練を「シェルパ」に対して施した。「シェルパ」全体を統括する「シェルパ」頭は「サーダー」(sirdar, 現地軍の指揮官)、登山隊のメンバーの世話をする担当の「シェルパ」は「オーダリー」(orderly, 従卒)と呼ばれるなど、「シェルパ」の呼称に、現地軍の呼称がそのまま用いられてきたことにも、その事情は反映されている。

「シェルパ」の実際の役割は、大別すれば、トレッキング(本格的な高所登山であれば、ベースキャンプまでの行程、いわゆるキャラバン)段階での物資輸送の手配、監督と、宿营地や食糧などの確保、サービス、及び高所登山における荷物の運搬であった。彼らはトレッキング段階では、時に「ガイド」として自ら状況を判断し、行動方針を決定することもあったが、基本的にはあくまで雇用者の方針、判断にしたがって行動する、忠実なサーバントであることを求められていた。ただし彼らの下には、さらに多くの単純労働者(一般ポーター)がいたのであり、軍隊になぞらえていえば、彼らの位置づけは、将校としての雇用者に対する下士官としてのそれであった。もっとも例外的には、卓越したサーダーが将校に準じて扱われることもあった。

これらの役割を果たす「シェルパ」として、シェルパがとりわけ高く評価された背景としては、一般に彼らが高地出身で、酸素が希薄で寒冷な高所への順応能力や、急峻な岩場、氷雪面などでの行動力に秀でていたこと、交易旅行の経験が豊富で現地で接触する住民との渉外や管理の能力を身に付けていたことがあげられる。確かにこれらの点が、短期間に秀れた「シェルパ」を出現させる有力な要因であったことは否定できない。ただ、当時そういった能力を身に付けていたのは、実は必ずしもシェルパだけではなかったこと、及びシェルパの中でも、「シェルパ」として積極的に活動したのは、一部の人々だけであったことなどに注意し

ておく必要があろう。東部ネパール高地のチベット系住民の中には、高地出身のシェルパと同じような生態条件の下で、類似の生業活動を行っていた人々が少なくなかったし、²⁹⁾実際にも、それらの人々の中にはダージリンへ出稼ぎに行き、シェルパ・ボティアの名の下に、「シェルパ」として活動した人が少なからずいたのである。

にもかかわらず、登山、トレッキングなどへ積極的に参加した人々の多数が、シェルパ、それも具体的にはソル・クンプの中でも、ナムチェ (Namche)、クムジュン (Khumjung)、クンデ (Khunde) など、クンプの特定の村々出身のシェルパであったことは、それが彼らの主体的な選択によるものだったことを示していると考えられる。³⁰⁾ともかく、シェルパという、ダージリンにおいてはより曖昧な意味あいを含む民族名称は、1930年前後には、ヒマラヤでの登山、トレッキングに関心を持つ人々には、高所ポーター、ガイドを意味する語として受け取られるようになってきた。そして、ソル・クンプ出身のシェルパも、シェルパ以外の民族集団に属する東部ネパール高地出身のチベット系の人々も、ともにそのような命名をさほど抵抗無く受け入れていった。おそらくその背景には、彼らのいずれもが、ダージリンにおいては移住者であり、全体として絶対的なマイノリティーであったという事実があろう。その中で比較的通りのよいシェルパという通称を用いることは、いずれにとっても決して不利ではなかったのである。

1930年代後半に入ると、ヒマラヤを目指す登山隊の数が増加したが、その多くはエヴェレストをはじめ、K₂(チョゴリ)、カンチェンジュンガ、ナンガ・パルバットといった、標高8,000mを越す巨峰の初登頂を、国の威信をかけて狙う大規模な登山隊で、各隊が雇う「シェルパ」の数も、しばしば数十名に及んだ。「シェルパ」の雇用はほとんどヒマラヤン・クラブのダージリン支部を通じて行われ、登山隊における「シェルパ」の役割や待遇も、イギリス人が1920年代に作り上げたスタイルが、ほぼ踏襲された。かくして「シェルパ」達は、年の大半を外国の登山隊とともに過ごし、そこから得る現金収入で生活を支えるようになる。職業としての「シェルパ」が確立したのは、1920年代後半であり、30年代に入ってその数は急速に増加する。³¹⁾「シェルパ」という職業は、シーズン毎の契約だけに、必ずしも安定したものではなかったし、危険も大きかった。³²⁾しかしその収入は、他の職種のそれにくらべてはるかに高水準であったし、資本も教育や特殊技能も不要であり、チャンスに恵まれれば短期間にサーダーの地位につくことも可能であった。ダージリン在住のシェルパやその他のボティアの間で、「シェルパ」の職種の経済的重要性は急速に高まっていった。ソル・クンプ、とりわけクンプの特定の村々からは、若くて野心的な人々が、同郷の有力なサーダーの縁故を頼ってダージリンへ出稼ぎに行き、そこに住み着いて「シェルパ」となってゆく、というパターンもしだいに出来上がってゆく。

だが当時においては、彼らの影響は、経済的にも社会的にも、ソル・クンプ地方そのものの変化を引き起こすという形では、あらわれてこなかったようである。むしろ、過剰人口を

積極的に吸収する場がダージリンに成立したために、ソル・クンプ(特にクンプ)の在来の生業が安定した形で維持されてきたという点にこそ、「シェルパ」という職業の積極的影響を見てとることができる。³³⁾この点は、多くの青壮年層をグルカとして送り出した地域とある程度共通しているが、それらの地域でのように、彼らからの送金や、退役して村へ戻った人々への年金が地域の経済の不可欠の要素となり、さらには退役兵が地域のリーダー層を形成したことによって、地域の政治、経済構造が大きく変化してゆくといった経過は、³⁴⁾まだ見られない。なんといっても「シェルパ」という職業が成立してから、第2次大戦でヒマラヤでの登山や旅行が中断されるまでの期間は、たかだか20年足らずなのである。また当時においては、登山者やトレッカーが、直接ネパールへ入ってくることもなかったから、彼らの及ぼす文化的な影響も、間接的でごく限られていた。

ところで、当時の「シェルパ」の活動の舞台は、エヴェレスト登山隊によるチベットを例外として、そのほとんどが英領インドに属していた。登山者やトレッカーは、ほとんどがイギリス人をはじめとする欧米人であり、彼らはすなわち植民地インドの支配者、ないしそれに準ずるエリートであった。そして「シェルパ」も、そのチームに属する限りにおいて、支配者の末端に連なる存在であったといっていよい。一般に観光という行為が、ある地域への「来訪者」(guest)と、そこでの「居住者」(host)の接触をひきおこすとするなら、「シェルパ」は、基本的には来訪者の側の一員であった。³⁵⁾もっとも現実には、来訪者と居住者が直接、接するとは限らず、むしろ定式化された観光においては、なんらかの専門的仲介者が介在するのが常であり、その仲介者がどのような背景から出ていて、どのような立場をとるかは、観光における来訪者－居住者関係にきわめて重要な影響を及ぼす。「シェルパ」は、トレッキング、ないしキャラバンの段階においては、しばしば仲介者的役割を果たしていたが、そこでは彼らは一般に、あくまで来訪者側に忠実に、その利益を最大限追求することによって、自らの地位も強化しようとしてきたといえる。³⁶⁾ORTNERは、シェルパ文化の重要なモチーフの一つとして、外部に存在する強力な保護者(protector)への依存と、その庇護の下での力の獲得を指摘し、外国の登山家との関係をその一例としてあげているが、³⁷⁾その一般的妥当性はさておき、ここでは「シェルパ」という職業が、植民地状況下で、支配者の末端に連なることによって成立しており、そこでの支配者への献身が自らの利益と力に直接つながっていたことを確認しておく。

1940年代、すなわち第2次大戦中とその後の数年間は、ヒマラヤ地域においては、登山をはじめ、観光にかかわる職業が成立する基盤は全く失われてしまう。1930年代に「シェルパ」という職業にかなりの程度依存していた、ダージリンのシェルパ社会にとって、この間は厳しい状況におかれていた時期であったと考えられるが、それを物語る具体的な資料は、今のところ得られていない。

3. 第2期—ネパール 1950～60年代

冒頭で述べたように、第2次大戦後の混乱がおさまった1950年代は、観光の大衆化の時代であり、とりわけ欧米から発展途上国への大規模な観光旅行が成立した時代であるとされるが、ヒマラヤにおいては、1950年代から60年代にかけては、登山や観光のありかたが大きく変換を遂げるにあたっての過渡期であったといえよう。

まず、ヒマラヤをめぐる政治状況は大きく変化した。英領インドは1947年、インドとパキスタンに分離、独立したが、カシミールの帰属をめぐる両国の紛争により、カラコルムを含む西部ヒマラヤは政治的に不安定な状況下に置かれることとなった。パキスタン領土内での登山やトレッキングには、インドに住む「シェルパ」を同行することは認められなくなり、パキスタン国境に近いインド領ヒマラヤも外国人旅行者に門戸を閉じたので、そこも「シェルパ」の活動領域からは除外されることになった。しかしこれに代わって、それまで鎖国状態にあったネパールが、外国人旅行者の受入れを1949年から部分的に、1950年には全面的に開始する。

もっとも1950年代においては、ネパールを訪れる外国人旅行者の数はまだ少なく、1962年の年間外国人旅行者数は約6,000人にすぎない。受入施設も、1959年のカトマンズのホテルのベッド数が約90という数字が示すようにごく貧弱で、観光がネパールの外貨獲得のための重要な産業となるには、まだしばらくの時間を要した。(表-1 参照)とはいえ、先に述べたように、ヒマラヤ登山やトレッキングの対象地として、インドやパキスタンのヒマラヤ地域のかなりの部分が、外国人にとっては訪れにくくなったこともあり、新たに開放されたネパールはヒマラヤ登山、観光の主要な舞台となってゆく。

表-1 ネパールの観光の概要

年度	外国人旅行者数(A)	登山者・トレッカー人数(B)	(B/A)%	ホテル ベッド数	旅行者換金 外貨額(C)	Cの総換金 外貨比(%)
1962	6,179					
1965	9,388			356		
1970	45,970					
1975	92,440	12,587	13.6		170.6	30.2
1980	162,897	19,302	11.8	5,109	636.8	26.8
1985	180,989	28,707	15.9	6,810	735.4	13.6
1990	254,885	39,999	15.7	10,244	3,121.0	23.0

* 単位100万ネパール・ルピー、1975は1974-75会計年度(以下、同)

資料出所 SATYAL: 1988, 40, 66.

H.M.G.: 1991, 23, 25, 26.

1950年代はヒマラヤ登山そのものにとって、「黄金時代」とも言うべき時代であった。ネパールにおいては、1950年のフランス隊によるアンナプルナ I 峰の初登頂にはじまり、1953年のエヴェレスト、1954年のチョー・オユー、1955年のカンチェンジュンガ、マカルー、1956年のローツェ、マナスル、1960年のダウラギリ I 峰と、標高8,000mを越える巨峰すべての初登頂が成し遂げられた。³⁸⁾これらの登山隊の多くは、初めのうちは、第2次大戦前のヒマラヤ登山のスタイルとシステムをほぼ踏襲していたといつてよい。すなわちそれらの多くは、ネパールの首都、カトマンズを起点として出発していったのだが、「シェルパ」の多くは、なおダージリンのヒマラヤン・クラブを通じて雇用していたのである。カトマンズには、「シェルパ」を斡旋する組織はまだ存在しなかったし、第2次大戦前に経験を積んだ優秀な「シェルパ」のほとんども、まだダージリンに健在であった。そして彼らの中から、エヴェレストの初登頂によって、一躍世界的なヒーローとなったテンジン・ノルゲイを初めとする、著名なサードーたちが輩出するようになる。

けれども「シェルパ」の活動の場は、かつてのような植民地インドの領土内から、独立国ネパールに変わった。登山隊の多くは、なおそれぞれの国を代表する性格をもっており、隊は豊かで隊員達もそれなりに選ばれたエリートであったかもしれないが、彼らはもはや、植民地の統治者やそれに準ずる人々ではなかった。そして、「シェルパ」にとっては、ネパール、とりわけ多くの登山家が集中したソル・クンプは、その時点で自らは住んでいなかったにせよ、親戚や友人の住む故郷であった。彼らが登山隊の中で果たすべく期待されていた役割は、基本的には変わっていなかったが、とりわけキャラバン段階でのそれに対する彼らの立場は、微妙に変化せざるをえなかった。すなわち、彼らは以前と同様に、来訪者と居住者の間で、仲介者としての役割を担っていたが、そこで無条件に来訪者の側に立つ存在であることは困難となってきた。隊の側に立つことが、「シェルパ」にとっても常に利益であるとは限らなくなってきたのである。もっとも、このような変化が現実の対立となって表面化することは、初めの間はなお、ごく限られていたようである。

しかし1950年代後半に入ると、「シェルパ」内部から具体的な変革の動きが出始める。ダージリンの「シェルパ」は1955年に組合を結成し、賃金や待遇、事故の場合の補償などについて、ヒマラヤン・クラブの規定とは異なる独自の規定を定めた。³⁹⁾おそらくこういった動きの背景には、インド政府が1954年にダージリンに創設した登山学校 (Himalayan Mountaineering Institute) の初代校長にテンデン・ノルゲイを、また教官にも何人ものシェルパを抜擢したことなどに示されるような、「シェルパ」の知名度や社会的、経済的地位の向上と、それにもかかわらず、ダージリンのヒマラヤン・クラブが、なお実質的にイギリス人の管理下に置かれていたことへの反発などがあったと考えられる。

これに対して、そのようなダージリンの「シェルパ」の動きを嫌った登山隊の一部は、ソル・クンプから「より淳朴な」「シェルパ」を直接雇用しようとしはじめる。⁴⁰⁾このような認識

と対応が矛盾に満ちていることは、すでに述べたことから明らかであろうが、いずれにせよ、これを契機に、登山隊やトレッカーの間での「ダージリン・シェルパ」離れが加速化してゆくことになる。もっともこれには、他のより直接的な原因も指摘しうる。まず、ネパールを主要な活動の舞台とする以上、その起点はカトマンズとならざるをえないので、ダージリンからわざわざ「シェルパ」を呼び寄せるのは、さまざまな点で不便であったし、しだいに観光、登山などからの外貨収入への期待を大きくしていったネパール政府としても、ネパールに住む人々を「シェルパ」として雇用させるのが望ましかった。1960年代に入ると、ネパールでの登山やトレッキングには、むしろソル・クンプをはじめとするネパール在住の「シェルパ」を雇用するのが普通となり、その斡旋組織として、ネパール人の経営するヒマラヤン・ソサエティがカトマンズに置かれるようになった。

職業としての「シェルパ」が、ソル・クンプに住むシェルパにとって、直接重要な意味を持つようになるのは、1960年前後からである。とりわけ、チベットとヒマラヤを結ぶ交易が、1959年のチベットでの動乱の結果、決定的な打撃を受けたために、それまで交易を重要な生業の一部としていたクンプの、特にナムチェを初めとする若干の村の人々にとっては、登山やトレッキングからの収入は、彼らの生活を支える最も重要な基盤となっていた。⁴¹⁾ 交易が職業として成り立たなくなったのとはほぼ同時期に、観光への就労の機会が急速に増したことは、とりわけクンプのシェルパにとっては、経済的には幸運なことであったといえよう。ソル・クンプからダージリン方面への人口の流出は少なくなり、むしろ1960年代半ばになると、「シェルパ」の職につくために、ダージリンの若いシェルパが、ソル・クンプやカトマンズへ戻ってくるようになる。ダージリンそのものは、独立後も相変わらず、東部インドの代表的な丘陵リゾート地としての性格を保っていたが、ダージリンを起点として登山やトレッキングを行う人数は激減し、そこで「シェルパ」として生活を支えてゆくことは、極めて困難となってきた。

ネパールでは1960年代後半に入ると、年間の外国人旅行者数が、前年比で25%から30%程度増加するようになり、1970年には実数で約46,000人と、10年間で11倍以上に増加した。⁴²⁾ ネパール政府にとっては、観光はしだいに重要な、しかも数少ない確実に成長の見込める産業として位置づけられるようになる。外国からの登山隊の受け入れは、1966年にいったん停止されるが、1969年には再開された。

3. 第3期－ネパール 1970～80年代

1970年代に入って、ヒマラヤ、とりわけネパールのヒマラヤ地域は、本格的な大衆観光の時代に入った。ネパールを訪れる外国人旅行者の数も、それにともなう外貨収入も、1970年代から80年代にかけてさらに急成長を遂げ、観光は、文字通りネパールの基幹産業の一つとなってきた。⁴³⁾ (表－1 参照) 登山やトレッキングを目的とする旅行者は、1970年代以降、年

によってかなり変動はあるが、少なくとも外国人旅行者総数の10%以上、滞在日数では3分の1以上を占めており、ソル・クンプ地方はネパールの中でも、もっとも多くに登山者、トレッカーが集中する地域の一つとなった。⁴⁴⁾ソル・クンプに特に多くの観光客が集中した理由としては、そこに世界最高峰エヴェレストをはじめとする、ネパールでも有数の山群が存在することの他に、1960年代以降、ネパール政府や諸外国の開発事業などによって、道路、飛行場などのいわゆるインフラストラクチャーが、他の地域に比べれば急速に整備されていったということがあげられる。⁴⁵⁾

ヒマラヤ、とりわけ比較的アプローチしやすくなったソル・クンプを訪れる登山者やトレッカーは、数が増加しただけでなく、内容も著しく多様化した。具体的には韓国やインドを初めとする東、南アジアや東欧諸国など、それまではほとんどこの地域には姿を見せなかった国々からの登山者、トレッカーが登場するとともに、西欧やアメリカ、日本などからの登山者、トレッカーなども、かつてのようなエリート登山家ばかりではなくなってきた。すなわち体力や技術、経験などの面で高い水準にもなく、経済的にも必ずしもそれほど豊かとはいえない人々が、大量に訪れてくるようになったのである。また一方では、ヒマラヤの自然ばかりでなく、シェルパの(より一般的にはチベットの、ないしより漠然とした「仏教的」な)民族文化に触れること自体を目的とした、いわゆる「民族文化観光」(ethnic tourism)⁴⁶⁾の傾向が、顕著に見られるようになるのも、この時期からといってよい。

表－2 ネパールでの登山隊の概要

年度	登山隊数	登山者数	雇用者数	登山隊のネパール国内での支出*
1980	64	639	7,638	11.8
1985	91	824	8,835	17.9
1990	120	966	12,179	68.4

* 単位100万ネパール・ルピー

資料出所 H. M. G. : 1991, 27

「シェルパ」の需要は急増したが、それと同時にその期待される役割は変化し、多様化した。そして、シェルパの観光とのかかわり方も、全体としてさまざまに分化し複雑化していった。

例えば比較的経験の乏しいトレッカーなどに対しては、「シェルパ」は、自らが責任をもって計画を立て、引率をするガイドとしての役割を果たすようになり、さらに経験を積み、資本を貯えた「シェルパ」の中からは、カトマンズにオフィスをかまえ、顧客を組織して「シェルパ」を斡旋し、必要な物資の調達や手続きの代行などを行う、旅行仲介業を営む者もあらわれてきた。

一方、多くの登山者、トレッカーが通過、滞在するようになったソル・クンプでは、これら

の人々に宿舎や食糧、輸送手段などを提供する職業も成り立つようになってきた。当初は、求めに応じて住居の一隅を貸し、ありあわせの食事を提供する程度だった人々は、顧客の増加にともない、少なからぬ資本を投下して、観光客対象のロッジやレストランを新築し、食物や土産物を用意し、さらにはその荷物を輸送するために、飼育する家畜の構成を変化させるなどして、積極的に対応するようになってきたのである。⁴⁷⁾

観光が経済全体の中で占める比重は、ソル・クンプの中でも、地域により村落によってもかなり異なっているが、1970年代以降、全体として著しく増加した。それと同時に、その影響は、シェルパという民族集団、ないし彼らが居住する地域を越えて、周辺地域の他の民族集団の間にも、広く波及するようになった。まず1970年前後まで、「シェルパ」のほとんどは、クンプの特定の村落出身者に限られていたが、その後、パラクやソル、ロールワリンなどの出身のシェルパにも広まり、1980年代に入ると、シェルパ以外のチベット系民族集団の出身者や、タマン (Tamang)、グルン (Gurung)、マガール (Magar) などのような、さまざまなチベット・ビルマ系諸語を母語とする民族集団の出身者も、この職種に参入しはじめるようになった。⁴⁸⁾もはや「シェルパ」という呼称自体が、現実を反映しなくなってきたといってもよい。

しかも影響は、こういった直接的な形にとどまらない。ソル・クンプ地域に多くの外部からの旅行者が訪れるようになり、そこに住むシェルパが、観光を通じて経済水準を向上させたことによって、この地域の食糧、雑貨等の需要は、質的にも量的にも著しく向上した。もともとソル・クンプのようなヒマラヤ高地では、生活必需品の多くは生産できないか、できたとしても量的に不足していたのだが、かつてはそれらの品は、シェルパ自身が交易活動を通じて入手していた。しかし観光業の発展とともに、彼らは交易活動から手を引き、南方の中級山地帯の人々が運んでくる消費物資の一方的買手に変化していった。いいかえれば、ソル・クンプは1970年代以降、南方の低地、中級山地帯の住民にとり、彼らの生産する農作物や、そこを経由して運ばれるさまざまな工業製品などの市場として大きな意味を持つようになってきた。ソル・クンプとその南方一帯で1960年代に成立し、その後発展を遂げてきた定期市や商店群は、そういった物資が具体的に供給、ないし中継される場なのである。⁴⁹⁾「シェルパ」はそこでは、自らの経済的優位を背景として、周辺の人々に対し、新しいエリートとしての地位を誇示するようになる。⁵⁰⁾

もっとも観光の及ぼした経済的影響は、全ての面でプラスに働いたわけではない。現金収入は全体として増加したが、それとともに内部での経済的較差も増大し、住民相互の矛盾もしだいに顕在化してきた。もちろんソル・クンプの住民の間では、観光への依存が進む以前から、一定の貧富の差があったのは事実である。⁵¹⁾しかし、雇用―被雇用の関係が住民内部で増加したり、住民同士が顧客をめぐる競争したり、「シェルパ」として顧客の利益を優先する者と住民としての利益を優先する者との対立が生じたり、といった現象が表面化する

ようになるのは、やはり観光客の直接の来訪が増加し、住民の観光とのかかわり方が多様化した1970年代以降である。⁵²⁾より直接的には、トレッカーの増加によって引き起こされた著しい物価の上昇は、観光からの現金収入を持たない人々にもっとも深刻な影響を及ぼした。⁵³⁾こういった影響に加え、トレッカーらによる寺院、僧院、仏塔などの宗教施設への汚損や、水源、森林などの汚染、破壊といった問題に対しても、直接観光に依存している住民と、それ以外の人々の間では、責任の所在や対応の仕方についての態度は分かれてくる。住民と来訪者の間の葛藤、住民間の葛藤、さらには個々人の内面における葛藤まで含め、ソル・クンプのシェルパ社会は全体として、観光への傾斜を強めるなかで、経済的、社会的な分解 (fragmentation) の過程をたどってきたといえよう。

もっともその一方で、観光の発展にともなう矛盾を多少とも緩和してゆくためのさまざまな試みが、シェルパ自身によってなされてきたことも見落としてはならないであろう。観光で成功した「シェルパ」の多くは、日常的にも、祭礼などに際しても、積極的に寺院、僧院などへの寄付に応じるし、カトマンズでは彼らが中心になって、シェルパの協会を組織し、独自に寺院を建設したり、新年のパーティを開いたり、貧困者の救済や葬儀の援助を行ったりしているのが、そのような試みの例としてあげられよう。⁵⁴⁾

III 「シェルパ」のイメージとシェルパの対応

ヒマラヤの高所登山のポーターとして、シェルパが、他のヒマラヤ高地の諸民族に比べても、とりわけ優秀な資質を持っている、という評価が定着するのは、1930年前後のダージリンにおいてであったが、その評価の具体的な内容は、すでにのべたように、1. 高所での荷上げにおける体力と技術、2. キャラバン運営における管理能力、3. 雇用者への忠実さ、正直さ、勇敢さ、快活さ、寛容さ、素朴さといったさまざまな人格面の特性である。これらの評価のうちには、例えばキャラバン運営に際しての駆け引きの巧みさや、ポーター管理の厳格さと、正直、寛容、素朴といった、相互に矛盾しかねない内容が含まれているが、いずれにせよこういったイメージは、まず登山家や登山隊に同行したジャーナリストなどの著作等を通じて広まっていった。⁵⁵⁾そして、それが世界的な規模で大衆レベルにまで行き渡るようになる決定的なきっかけとなったのは、1953年のイギリス、エヴェレスト登山隊における、テンジン・ノルゲイの活躍であった。⁵⁶⁾

このような「シェルパ」のイメージが形成されるに至ったのは、一方では「シェルパ」の置かれていた状況の中で、「シェルパ」自身が、彼らへの期待を正確に把握し、主体的、積極的に対応していった結果に他ならない。いいかえれば「シェルパ」は、FISHER も指摘するように、⁵⁷⁾登山者などが期待する役割にあわせて演技し、そのイメージを定着させることに成功したのである。

MANZARDO は、やはりネパール中部、カリ・ガンダキ流域で、交易民として活発に活動し

てきた民族集団タカリー (Thakali) が、交易の相手にあわせて、自らのイメージを演じ分けてきたことを指摘しているが、⁵⁸⁾「シェルパ」における、上述のようなイメージ操作の能力も、あるいはそれまでの交易活動によって培われたのだと考えることもできよう。

1970年代に入ると、ネパールは大衆観光の時代を迎え、旅行者の多くはヒマラヤの自然とともに、エキゾチックな民族文化に触れることもその目的の一部とする傾向が強まってくる。ネパールは周知のように、南部のタライ平原から北部のヒマラヤ主脈北面のチベット高原まで、きわめて多様な自然と、インド・アーリア系、チベット・ビルマ系の多くの言語をそれぞれに母語とする多くの民族集団の文化が併存する国家である。だが人口の大部分が住むのは、標高1,000~2,500m前後までの中級山地帯と、近年では山地から多くの人々が移住してきたタライ平原であり、人口の上でも、また政治、経済的にも、支配的な民族集団は、インド・アーリア系のネパール語を母語とするヒンドゥー教徒、いわゆるパルバテ・ヒンドゥーである。シェルパをはじめとするチベット系の諸民族は、全体としてもネパールの人口の1%にも満たないマイノリティーであり、パルバテ・ヒンドゥーからは、一括してボティアとして、多少とも軽侮の眼で見られてきた人々である。彼らが主に住む標高3,000mを越える高地は、ソル・クンプを含め、ネパールの中では辺境でしかない。

だが、外国からネパールを訪れる観光客にとって、ネパールとはまず何よりも氷雪を頂くヒマラヤの高峰であり、彼らが文化的にもっとも強い関心を寄せたのは、高地に住むチベット系の住民であった。⁵⁹⁾このような傾向自体が、すでに述べたように、1960年代までにネパールを訪れた登山家やジャーナリスト、さらには民族学者などの関心そのものや、彼らの著作等によって形成されていったわけだが、観光がネパールにおいて重要な産業として成立するようになるにともない、既成のイメージは、より直接的な手段で、大量に再生産されるようになってくる。とりわけチベット系民族の中でも、「シェルパ」としての活躍を通じて知名度の高まったシェルパは、彼らが住む地域とともに、それ自体が有力な観光資源として扱われるようになり、政府やトラベル・エージェントの発行するポスターやパンフレット、旅行案内書などには、シェルパの村々やそこに住む人々、僧院などの写真や、快活で素朴な、ホスピタリティに富むシェルパについての記述が溢れるようになるのである。

こういったイメージの原形は、たしかにかつての登山家などの記述に求められるのだが、実はそれは、もともとはあくまで「シェルパ」という職業に従事していた人々と、その直接の雇用者の間の、登山期間とその前後という限られた状況下の、しかも、さかのばれば植民地時代という特殊な条件の下での関係を反映したものでしかなかったはずである。だが1970年代以降、それはシェルパという民族集団全体に対するイメージにすり替えられて流布されるようになり、こういったイメージをあらかじめ抱かされた多くのトレッカーを、ソル・クンプは迎えるようになるのである。しかし、現実の「シェルパ」とトレッカーの関係は大きく変化していたし、居住者としてのシェルパが、直接多くの来訪者としてのトレッカーを迎

えるといったことは、そもそもシェルパ自身、従来経験したことのない、新しい事態だったといつてよい。

「シェルパ」にとって、登山家やトレッカーは、もはやかつてのように、植民地支配者の権力と権威を背景としているわけでもなく、また個人としても、必ずしも秀れた能力と豊かな経済力を持つ、頼りになるパトロンであるわけではない。むしろその多くは、十分な体力、技術や経験もなく、ぎりぎりの経費しか払おうとしない、頼りない存在である。にもかかわらずそのような雇用者は、自らの抱いている「シェルパ」のイメージに基づいて、サービスと忠誠を要求ないし期待し、それを得られなかった場合には、「シェルパ」はスポイルされたと嘆くことになる。「シェルパ」の側からすれば、そのような評価自体が、現実の変化を無視した身勝手での的はずれなものとうつつが、⁶⁰⁾現実には、雇用者のプライドと「シェルパ」へのイメージを可能な限り損なわないように、注意深く振る舞うことになる。⁶¹⁾すでに「シェルパ」の職に、シェルパ以外の民族集団からもかなりの人数が参入してくるほどに、競争が激化している現状において、これまで築き上げてきた「シェルパ」のイメージを失うことが、シェルパにとって好ましくない結果を招くことは、彼ら自身が熟知している。とはいえ、特に若い世代の「シェルパ」の中には、トレッカーとも同じレベルの教育を受け、近代的な価値観を身に付けた人々も少なくない。彼らにとっては、従来と同様のイメージにしたがって行動することは、より深刻な葛藤を自らの中に引き起こすこととなる。⁶²⁾

シェルパの中でも、居住者として、すなわちロッジやレストラン、商店などの経営者として、あるいは荷物の運搬などによって、トレッカー等と直接接し、そこから収入を得ている人々の場合も、ステレオタイプとしての「シェルパ」ないしシェルパのイメージにしたがって行動することは、一般に必要であるとみなされている。とりわけ、多くのロッジや商店などが相互に競合するような状況が生じている地域では、トレッカーの抱いているイメージにふさわしいサービスを提供することは、より多くの顧客を確保する有力な手段である。けれども、彼らと顧客との関係は、一般にある程度長期間にわたる「シェルパ」とトレッカーなどとの関係に比べ、概してその場限りの取引であり、したがってその「演技」も、表面的なレベルにとどまることが多いといえよう。

これに対してシェルパの中でも、直接観光から収入を得ていない人々の場合、自らをトレッカーなどの抱いているイメージにあわせて演技する必要は、何ら存在しないことになる。ソル・クンプのシェルパ社会にはこのように、トレッカーなどとの関係において、さまざまに立場の異なる人々が併存するし、そのことを反映して、人々のトレッカーに対する対応も多様にならざるをえない。もっとも現実には、個々のシェルパの立場自体が変化する可能性は常に存在するし、また個人が世帯、村落、地域、更にはシェルパという民族集団の一員としての意識を保持している限り、その行動が完全に個人の立場に立ってのみなされるわけではないということも自明である。

全体としてみれば、1980年代末の時点においても、一方ではソル・クンプを訪れるトレッカーの間には、1930年代に定着した「シェルパ」のイメージが、いくぶん希釈されたとはいえ、なおシェルパー一般にすり替えられて残存しており、かつ観光業者やジャーナリストなどを通じて再生産され続けている。そして他方では、シェルパ自身も、そのイメージが作られたものであることを半ば自覚しつつ、⁶³⁾そのイメージを維持し、利用し続けてきたといえる。そうすることは、彼らが大きく依存している観光関連の職業において有利であるというだけでなく、自らの集団としてのアイデンティティを維持するとともに、⁶⁴⁾他の民族集団に対して、社会的な地位を守り、強化してゆくうえでも有効な手段だったのである。ネパールという国家の中ではマイノリティーであり、文化的にも周辺的な存在でしかないシェルパが、そのネパールに対して経済的にも政治的にも強い影響力を持つ欧米などの諸外国の観光客には、知名度や評価がきわめて高く、ときにはネパールを代表する民族集団であるかのようにさえ見なされているという事実は、観光業におけるシェルパの目覚ましい経済的な成功とともに、他の有力な民族集団の間でも、近年は広く知られるようになってきた。シェルパをボティアの一集団として、自らより一段低い存在と見なす傾向の強いパルパテ・ヒンドウーのエリートにとっても、国の主要な産業の一つである観光の領域に関する限り、シェルパのイメージが持つ高い価値を無視するわけにはいかない。⁶⁵⁾

そしてこのような状況の下で、従来はさまざまな、独自の民族集団名ないし出身地方名を名乗っていたチベット系の人々の中から、個人的に、ないし集団として、観光客等に対してシェルパと自称したり、さらに積極的にシェルパと通婚を進めるなどして、シェルパと同化してゆくとする人々もあらわれる。もともとシェルパという民族集団は、すでに多くの研究者によって指摘されているように、その帰属に関して開放的であり、周辺部に外部から成員を取り込み、同化しながら集団を拡大してきた歴史を持つが、⁶⁶⁾観光を通じてシェルパの積極的なイメージが拡大したことは、この過程をさらに促進する役割を果たしているといえよう。

IV おわりに

ネパールにおいて観光は、おそらく1990年代以降も、短期的には多少の変動はあっても、成長を続け、もっとも重要な産業の一つとしての地位を当面は保ち続けるであろうし、シェルパにとっては、どのようにそれに対応してゆくかが、ますます重要な課題となってゆくであろう。

本稿で扱った、今世紀初頭から1980年代までを通じて、シェルパは各々の時代の状況に対し、主体的、積極的に取り組むことによって経済的に成功し、その成功を背景として社会的な地位や文化的なアイデンティティの維持、強化をも成し遂げてきたといえる。このこと自体は、高く評価すべきことであるに違いない。

ただ、1970年代以降、状況も、またシェルパの観光とのかかわり方自体も、著しく変化し、多様化した。にもかかわらず、シェルパに対するイメージが、なお基本的には1930年代、すなわち植民地時代の原形を多分にとどめており、現実の観光客とシェルパとの関係も少なからずそれに規定されていることは問題である。その原因としては、観光、とりわけ先進資本主義国から発展途上国への観光が、それ自体、一種の「帝国主義」としての側面を本質的に含んでいること、⁶⁷⁾そのことを背景として、かつてのイメージが観光業者やジャーナリズムによって今日もなお再生産され続けていること、そしてシェルパ自身も、ネパールにおいてマイノリティーであるために、かえって外部のより強力なパトロンに依存する指向性を残していること、⁶⁸⁾などが指摘できよう。観光の本来あるべき姿としての、対等な来訪者と居住者との関係が構築されるためには、解決されなければならない問題が、なお多いのである。その意味では、現在も状況は流動的であり、その動向を筆者自身も注目し続けてゆきたいと考えている。

注

- 1) SMITH : 1989, 1 ~ 4。
- 2) 石森 : 1991, 33, SMITH : 1989, ix-xi など参照。
- 3) シェルパと観光との関係を主要なテーマとする論考としては、BROWER : 1991, FISHER : 1986, 1990, FÜRER-HAIMENDORF : 1984, MILLER : 1965, ORTNER : 1989, SACHERER : 1981 などがあり、筆者も一般向けの概説という形で(鹿野 : 1975, 1986)論じたことがある。
- 4) 19世紀半ばから、まずカルカッタ周辺に位置する英国人むけの保養地として、ついで茶をはじめとするプランテーションの立地として発展したダージリンは、シェルパを含むネパール東部山地住民の出稼ぎ、移住の地として重要であった。鹿野 : 1980a, 1985 参照。
- 5) 本稿では便宜上、ヒマラヤでの高所登山やトレッキング(特に登山技術を要しない範囲での徒歩旅行)のガイド、高所ポーター、コックなどの職業、ないしそれに従事する人々を指す通称として「シェルパ」と「」付きで記し、民族集団を指す語としてのシェルパと区別する。
- 6) ボテ、ボーティア(Bhotia)、ブティア(Bhutia)などの呼称は、一般にヒマラヤではアーリア系住民がチベット系、ないし彼らがチベット系とみなす民族集団を指す通称で、しばしば多少とも蔑称的なニュアンスを含むが、地域によって具体的に指す集団は異なっている。
- 7) FÜRER-HAIMENDORF : 1964, OPPITZ : 1968 など参照。
- 8) BISHOP : 1989。
- 9) OPPITZ : 1968。
- 10) OPPITZ の1965年の統計によれば、クンプの人口の約37%が、最近の数世代の間にチベットから移住してきた、いわゆるカンバ(Khamba)である。OPPITZ : 1968, 107。あわせて AZIZ : 1978, FÜRER-HAIMENDORF : 1964 など参照。
- 11) クンプの南のいわゆるパラク(Pharak)地方や、西のロールワリン(Rolwaling)へのソル・クンプからのシェルパの移住は、筆者自身の聞き取りでは、やはり19世紀後半から20世紀初めに開始されている。
- 12) O'MALLEY : 1905, 45。
- 13) MINISTRY OF DEFENCE : 1965, 131。
- 14) OPPITZ : 1968, 109。
- 15) ベンガル平原とダージリンを結ぶ、延長82kmの馬車道が完成したのは1869年、ほぼこの道路上を走る鉄

- 道の営業開始は1881年である。茶園は1856年にはじめて成立したが、その数は1861年に22、1871年に62、1881年には155に増加した。RAY：1967、鹿野：1985参照。
- 16) ダージリンの町の人口は1850年に1万人を越えた。地区の人口は、1872年に94,712人、1881年に155,179人、1891年に223,314人、1901年に249,117人と増加している。O'MALLEY：1905, 35-36。
 - 17) FÜRER-HAIMENDORF：1964, 1976参照。
 - 18) 鹿野：1972, 1978, 1979, 1980a. など参照。
 - 19) 鹿野：1980b, 14, ORTNER：1989, 105。
 - 20) CAPLAN：1970参照。
 - 21) 鹿野：1980a, 66-67, ORTNER：1989, 107。
 - 22) O'MALLEY：1905, 38-41。
 - 23) O'MALLEYによれば、ダージリンには、シッキム系、ネパール系、ブータン系、チベット系の4つのボティアのグループがあり、このうちネパール系がシェルパ・ボティアである。ダージリンのボティア人口の総計は、20世紀初めに約9,050人とされる。O'MALLEY：1905, 45。
 - 24) BROWER：1991, 61, ORTNER：1989, 103-104, 160-161。
 - 25) メイスン：1975, 136-196。
 - 26) MINISTRY OF DEFENCE：1965, 130-133。
 - 27) メイスン：1975, 218-247。なお、1921年以前にも、若干の登山家がシェルパをトレッキングに同行していることを、メイスンは指摘している(例えば1907年のケラスら)が、その時点では「シェルパ」であることは、まだ職業として確立していなかったと思われる。ibid. 206-214。
 - 28) メイスン：1975, 247-251。
 - 29) FÜRER-HAIMENDORF：1976, chap. 5。
 - 30) クンプの内部においても、村によって生業の中での農業、牧畜、交易それぞれへの比重のかけ方はかなり異なっているが、その差も必ずしも立地、生態条件の差を反映していたわけではなかった。FÜRER-HAIMENDORF：1976、鹿野：1980bなど参照。
 - 31) 1930年代に「シェルパ」の職に専門的に従事していた人々の実数は、ヒマラヤン・クラブの登録者に限っても150名を越える。メイスン：1975。
 - 32) 1920～30年代を通じてどれほどの「シェルパ」が、登山中の事故で死亡したか、正確な記録はないが、例えばナンガ・バルバットでは1934年と1937年に、合計15名の「シェルパ」が生命を失っている。メイスン：1975, 306。
 - 33) ORTNER：1989, 159-160。
 - 34) グルカが、その出身地の地域社会に及ぼした影響については、CAPLAN：1970, HITCHCOCK：1966, HÖFER：1978, MACFARLANE：1976など参照。
 - 35) host-guest という図式は、SMITH：1989による。
 - 36) 「シェルパ」の登山隊側になつての「献身」ぶりを記述する登山隊の記録にはことかかないが、ここでは典型的な一例のみをあげておく。「(サーダーの)レワは鋼のように突っ立ち、その太いステッキで(ポーターの)背中といわず頭といわず、メリメリ音のするほど容赦無く残酷に打ち叩く。一人の苦力が、その部隊を組分けして自ら副指揮官のように振舞った。するとレワは彼の両手を拳固でやつつけ、バンガロウのヴェランダから雪の中へ投げ飛ばした。」ベヒートルト：1937, 20。()は内は筆者の補足、その他原文のまま。
 - 37) ORTNER：1989, 163-167。
 - 38) ちなみに、パキスタン領カラコルムでも、1953年のナンガ・バルバットを皮切りに、標高8,000m以上の山々は、すべて1950年代に初登頂されている。
 - 39) 鹿野：1975, 24-25。
 - 40) はじめてソル・クンプから、直接多くのシェルパを雇用したのは、おそらく1955年のイギリスのカンチエンジュンガ登山隊であり、それには1953年のエヴェレスト登山隊が、クンプに一定期間滞在した経験

が生かされていると考えられる。鹿野：1975参照。

- 41) この間のプロセスは、注3)にあげた諸文献が詳しく述べているので、ここでは繰り返さない。
- 42) SATYAL：1988,40。なお、ここでいう外国人はインド人を含んでいない。
- 43) 鹿野：1986,282-283。
- 44) BROWER, FISHERらの推計によれば、クンプを訪れる登山者、トレッカーの数は、1960年代には年間数十名から数百名を越えなかったが、1970年代後半には年間約4,000人、1980年代後半には年間約7,000人になった。BROWER：1991,67, FISHER：1984,66,1990,148-149。
- 45) 例えば、ナムチェへ1日行程のルクラの飛行場建設についてはFISHER：1990,43-52,ナムチェのすぐ上部のシャンボチェ飛行場の建設については、宮原：1982など。その影響は、決して観光を通じての経済面に限られるわけではなく、国家の行政機構への組みこみの強化をはじめ、社会、文化の様々な面に及んでいるが、ここではこれ以上触れない。
- 46) SMITH：1989,31-32。ただしここでは、ethnic tourismを単純に、エキゾチックな異民族文化に触れることを目的とした観光と解しておく。
- 47) クンプで飼育する家畜の構成が、もともとの乳用や一代雑種増殖用から、1970年代後半以降、観光客のための輸送を目的とした駄用へと重点が変わった過程については、BROWER：1991,chap,4~5, FÜRER-HAIMENDORF：1984,19。
- 48) FISHER：1990,123, FÜRER-HAIMENDORF：1984,78。
- 49) 鹿野：1989,1990a参照。
- 50) 鹿野：1990b。
- 51) DRAPER：1988,142, FÜRER-HAIMENDORF：1964,11。
- 52) DRAPER：1988,143-144, FISHER：1990,121, FÜRER-HAIMENDORF：1984,67-68。
- 53) クンプでの物価や賃金の1970年代以降の変動については、FISHER：1990,116,鹿野：1990a,40-41など参照。
- 54) カトマンズのシェルパの協会は1975年頃、約35世帯の代表者で結成されたが、1992年には約600世帯が加わっている。FISHER：1990,173, FÜRER-HAIMENDORF：1984,73,92,99なども参照。
- 55) MEISSEN：1975,269。
- 56) 例えば、ULLMAN：1955。より大衆的な形でそのようなイメージを増幅する役割を果たしたものの典型的な例としては、FISHERも指摘するように(FISHER：1990,124)、エルジェ：1983(原書1960)があげられる。
- 57) FISHER：1990,125。
- 58) MANZARDO：1982。あわせて飯島：1984,96も参照。
- 59) 歴史的には、1959年のチベットの動乱と、グライ・ラマー行のインドへの脱出という事件や、1960年代以降の欧米での、仏教への大衆的な関心の高まりなどが、この傾向を助長したといえるかもしれない。
- 60) FÜRER-HAIMENDORFの、かつてのシェルパの快活さ、親しみやすさ、寛容さや親切さが、外部の人々との接触の増加によって失われたとする見解(FÜRER-HAIMENDORF：1984,XI)は、こういった身勝手さの例といわざるをえない。
- 61) 「シェルパ」が顧客の呼称として、個人名を用いるか、植民地時代からの呼びかけである「サーブ」(sahiv)という尊称を用いるか、相手によって使い分けるという例は、FISHERによっても報告されている。FISHER：1990,137。
- 62) 「シェルパ」として演技し続けることの緊張がもたらす内的、心理的葛藤と、その結果としての行動(例えば過度の飲酒)についてはFISHERもすでにふれている(FISHER：1990,125)が、「演技」自体は近年になってはまったことではない。
- 63) 筆者は従来の「シェルパ」ないしシェルパのイメージを構成する特性のすべてが、「観光客向けの演技」であると主張したいわけではない。むしろそれらは、シェルパ社会の伝統的な価値観や規範に裏打ちされることによってのみ、他者に対しても説得的な演技でありえたはずである。ただそういった価値観や

規範は、もともと無条件、無制限に他者一般に適用されてきたのではないと考えているにすぎない。

- 64) 外部から来る観光客の高い評価が、集団のアイデンティティ強化に結びつくことについて、一般的には MCKEAN : 1989、特にシェルパの場合については、DRAPER : 1988, 148, FISHER : 1990, 139, ORTNER : 1989, 162-165など参照。
- 65) いいかえれば、ネパールという国家の中で、シェルパは観光以外の領域では依然として周辺的な存在でしかない。そのことが、先行世代の経済的な成功を背景として、高等教育を受けた若いシェルパの多くが、いったんは公務員やその他の観光と関係ないホワイトカラーの職などに就きながら、結局は観光業に戻ってしまうという事実(FISHER : 1990, 96-105)を説明しているように思われる。
- 66) FÜRER-HAIMENDORF : 1964, OPPITZ : 1968など参照。
- 67) NASH : 1989参照。
- 68) ORTNER : 1989, 78-79。

参 考 文 献

- AZIZ, B.
1978 *Tibetan Frontier Family*, Vikas Publishing House.
- BISHOP, H.
1989 From Zomo to yak; Change in a Sherpa Village, *Human Ecology*, 17-2, 177-204.
- BROWER, B.
1991 *Sherpas of Khumbu-People, Livestock and Landscape*, Oxford University Press.
- CAPLAN, L.
1970 *Land and Social Change in East Nepal*, University of California Press.
- DRAPER, J.
1988 The Sherpas Transformed; Toward a Power Centered View of Change in Khumbu, *C.N.S.*, 15-2, 139-162.
- FISHER, J. F.
1986 Tourists and Sherpas, *C.N.S.*, 14-1, 37-61.
1990 *Sherpas; Reflection on Change in Himalayan Nepal*, University of California Press.
- FÜRER-HAIMENDORF, C. VON.
1964 *The Sherpas of Nepal*, John Murray.
1976 *Himalayan Traders*, John Murray.
1984 *The Sherpas Transformed*, Sterling Publishers.
- H. M. G.
1989 *Statistical Year Book of Nepal 1989*, Kathmandu.
- H. M. G. MINISTRY OF FINANCE.
1991 *Economic Survey; Fiscal Year 1990-1991*.
- HITCHCOCK, J. T.
1966 *The Magar of Banyan Hill*, Holt Rinehart and Winston.
- HÖFER, A.
1978 A New Rural Elite in Central Nepal, in FISHER, J. F. ed. *Himalayan Anthropology*, Mouton Publishers, 179-186.
- MACFARLANE, A.
1976 *Resources and Population; A Study of the Gurungs of Nepal*, Cambridge University Press.
- MANZARDO, A. E.
1982 Impression Management and Economic Growth; The Case of the Thakalis of Dhaulagiri Zone,

Kailash, 9-1, 45-60.

McKEAN, P. F.

1989 Toward a Theoretical Analysis of Tourism, in SMITH, V. L. ed. *Hosts and Guests; Anthropology of Tourism*, 2nd ed., University of Pennsylvania Press, 119-138.

MILLER, R.

1965 High Altitude Mountaineering, Cash Economy and the Sherpa, *Human Organization*, 24-3, 244-249.

MINISTRY OF DEFENCE, U. K.

1965 *Nepal and the Gurkhas*, London.

NASH, D.

1989 Tourism as a Form of Imperialism, in SMITH, V. L. ed. *Hosts and Guests*, 37-52.

O'MALLEY, L. S. S.

1905 *Bengal District Gazetteers, Darjeeling*, (1985 reprint) Logos Press.

OPPITZ, M.

1968 *Geschichte und Sozialordnung der Sherpa*, Universitätsverlag Wagner.

ORTNER, S. B.

1989 *High Religion; A Cultural and Political History of Sherpa Buddhism*, Princeton University Press.

RAY, B.

1967 *District Census Handbook, Darjeeling*, Census of India, 1961.

SACHERER, J.

1981 The Recent Social and Economic Impact of Tourism on the Sherpas Community, in FÜRER-HAIMENDORF, C. von. ed. *Asian Highland Societies*, Sterling Publishers, 157-167.

SATYAL, Y. R.

1988 *Tourism in Nepal; A Profile*, Nath Publishing House.

SMITH, V. L. ed.

1989 *Hosts and Guests; The Anthropology of Tourism*, 2nd ed. University of Pennsylvania Press.

ULLMAN, J. R.

1955 *Man of Everest*, George G. Harrap.

ベヒトールト

1937 『ヒマラヤに挑戦して—ナンガ・パルバット—一九三四年登攀』小池新二訳, 河出書房.

エルジェ

1983 『タンタンチベットをゆく』川口恵子訳, 福音館(原書1960).

飯島 茂

1984 『ヒマラヤの彼方から—ネパールの商業民族タカリー生活誌』, 日本放送出版協会.

石森秀三

1991 「観光芸術の成立と展開」, 石森秀三編『観光と音楽』, 民族音楽叢書6, 東京書籍, 17-36.

鹿野勝彦

1972 「クンプのシェルパにおける経済の変遷」, 『季刊人類学』3-2, 159-186.

1975 「ヒマラヤ登山におけるシェルパの位置づけ」, 『岩と雪』41, 20-29.

1978 「ヒマラヤ高地における移牧—高地シェルパの例を中心に」, 『民族学研究』43-1, 85-97.

1979 「ロールワリン・シェルパの経済と社会」, 『リトルワールド研究報告』3.

1980a 「村落の経済変化と国境—インド・ネパール国境のケース・スタディ」, 『民族学研究』45-1, 59-69.

1980b 「ヒマラヤ高地民の交易」, 『リトルワールド年報』3, 1-26.

1985 「ダージリン・ノート」, 『東海山岳』5, 日本山岳会東海支部, 173-184.

1986 「登山・観光」石井溥編『もっと知りたいネパール』, 弘文堂, 269-288.

- 1989, 90a 「ネパール東部山地の定期市」I, II, 『金沢大学文学部論集行動科学科篇』9, 85-118. 10, 33-58.
 1990b 「定期市における経済関係と社会関係—ネパール山地の事例から」, 阿部年晴・伊藤亜人・荻原真子編『民族文化の世界』下, 小学館 33-54.

メイスン

- 1975 『ヒマラヤ—その探検と登山の歴史』田辺主計・望月達夫訳, 白水社(原書1955).

宮原 巍

- 1982 『ヒマラヤの灯』, 文芸春秋社.

C.N.S.—Contributions to Nepalese Studies.
 H.M.G.—His Majesties Government, Nepal.